

国際業務の 窓辺から

CLAIR 経験者からの
メッセージ

相手はどこまで行っても同じ人間 ～海外勤務で気付くこと～



香川県政策部文化芸術局瀬戸内国際芸術祭推進課 常金 志信

東日本大震災直後の2011年4月から1年間の自治体国際化協会（クレア）の東京本部勤務を経て2012年4月から2年間、私は北京事務所で勤務しました。東京での1年間は相当な時間の語学学習をできたにも関わらず、北京での生活や仕事をするレベルにはほど遠く、渡航してしばらく、事務所で一番避けていた仕事は「電話をとること」だった様な気がします。

そんな私が2年間の北京での勤務を、充実感をもって終えられたのは、言語に関係なく「相手としっかり話す」を実践したからだと思います。事務所の現地スタッフや中国の行政関係者は、打合せの際、些細なことでも疑問点があれば確認してきます。彼らの大半は流暢な日本語を話すのですが、私自身が中国語で話さなければならないという妙な義務感にとらわれるあまり常に不安で、多少不明瞭なことがあってもできるだけ早く会話を打ち切ろうとしました。そんな私の思いを彼らは敏感に感じ取るわけで、当然信頼関係が生まれず、仕事は良い方向に向きませんでした。ところがある仕事をきっかけに、自らが中国語で会話することを諦めて積極的に現地スタッフに通訳をお願いし、相手とお互いの疑問点を徹底的に解消し合うよう努め始めると次第に信頼関係が生まれ、色々な仕事がうまく回り始めたように思います。そうなると思議なもの、語学力も少しずつ上がり、なんとか及第点レベルにはなったと思います。

話す相手は、どこまで行っても同じ人間。相手の話にしっかり耳を傾け、こちらの考えを率直に伝え、お互いの着地点を見



中国の研究機関でプレゼンテーションを行う様子

出していく。考えてみれば他人と一緒に何かを作り上げていくための基本的なことですが、言葉に不自由することの少ない日本においては意識しにくいことかもしれません。北京事務所で勤務してこそ、言葉や社会慣習の違う海外に暮らしてこそ、改めて意識できたことだと思います。帰国後、空港関係やアート・観光に関する業務を担当し、公務員とは基本的な考え方が少し異なる民間企業の方々と話す機会が多いのですが、渡航前よりもしっかり意識して話ができるようになり、その成果は出せていると考えています。

北京に暮らして、自分にはどうやっても理解できないだろうと強く印象を受けた写真があります。帯同していた息子が通っていた幼稚園での一枚です。この幼稚園には、現地の子ども、付近の各国大使館職員のご息などが通っていました。子ども達は話す言葉もまちまちですが、みんな仲良く遊んでいます。そこでは私がつい考えてしまうような「何々(国)人」という意識はなく、それぞれが持つ名前があるだけです。グローバル、ボーダレスとはこういうことだ、後ろからそっと肩を叩かれたような写真です。



ボーダレスな子ども達

プロフィール

- 所属：
香川県政策部文化芸術局瀬戸内国際芸術祭推進課
- 業務内容：
3年に一度開催される瀬戸内国際芸術祭において主に広報業務を担当
- クレア時代の所属：
2011年4月～2012年3月 東京本部企画調査課
2012年4月～2014年3月 北京事務所